【実践主題】地域の具体的な事実を社会全体につなぐ地域教材の開発と活用
―副読本『私たちの未来へつながれ　くろさき茶豆大橋』を活用した公民学習を通して―

【実践の概要】身近な地域教材を取り上げるだけで、政治が児童にとって自分事になるわけではない。そこで、「くろさき茶豆大橋」を公民学習の中核教材とした。地域の具体的な事実と政治の仕組みとのつながりを、児童が追える単元を構成した。令和７年度は、単元の流れを見直した。また、追究の順に資料を副読本へ配列した。既習資料に立ち返り、複数の資料や視点を関連付けながら判断を深めることができるようにした。こうした学習を通して、児童は公共事業の必要性を根拠をもって判断した。学んだ見方を地域の未来への提案にも働かせた。地域を窓口に、政治を自分たちの生活に関わるものとして捉えることができた。

1　主題設定の理由

これまで、児童に身近な地域の素材を社会科で扱ってきた。関心が高まる一方、地域について詳しく知ること自体が目的となり、地域の事実と行政・議会・予算等の政治の仕組みとの関係まで考えが深まらないことに課題を感じてきた。そこで本稿では、政治の働きを自分の生活や地域課題と結び付け、学習した見方や資料を用いて考え、判断する姿を「地域を自分事として捉える姿」とした。

第６学年「我が国の政治の働き」では、地方公共団体の政治と住民生活との関係を、政策の内容や計画から実施までの過程、予算等に着目して考えることが求められる（文部科学省，2018）。また、国立教育政策研究所（2020）は、第６学年社会科の「思考・判断・表現」について、社会的事象の意味を多角的に考えるとともに、社会に見られる課題を捉え、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断することを示している。こうした学びは、政治や社会の課題を自分に関わるものとして捉え、社会の構成員としてよりよい社会の形成について考える主権者教育にもつながる。そこで本実践では、地域の具体的な事実を窓口に政治を自分事として捉え、根拠をもって判断し、地域への関わり方を考えることを目指した。そのための地域教材には、次の三つの条件が必要であると考えた。

①住民の願いや地域課題が具体的に見えること。

②行政・議会・予算等、政策が実現するまでの過程を追えること。

③費用や環境等も含め、複数の立場から必要性を判断できること。

くろさき茶豆大橋は、住民の長年の願いから完成までの過程、完成後の効果や課題を一つの事象として追究できる。この三つの条件を備えた地域教材として、第６学年公民学習の中核に位置付けた。

2　授業の実際

（1）実践１「教科書から茶豆大橋へ」黒埼南小学校６年１組１９名　令和６年６月実施　全１４時間

①教科書の学びを地域へ

第６学年１組 19 名を対象に実践した。前半では、教科書（「小学社会６」教育出版）の浜松市の子育て支援等を扱った。市民の願いが、行政、市議会、予算等と関わりながら実現していくことを学んだ。その後、「新潟市民の願いを叶え、社会の課題を解決するために、政治はどのような働きをしているのだろう」と問うた。新潟市の交通や渋滞、救急搬送等の課題へ視野を広げ、くろさき茶豆大橋を取り上げた。指導案では９時間で計画していた。しかし、教科書事例で政治の仕組みを学んだ後に、地域事例を位置付けたため、学習内容に重なりが生じた。結果として、単元全体は 14 時間となった。また、学習が一時間ごとに区切られる傾向があった。児童にとって、これまでの学びと次の問いとのつながりが見えにくかった。次に何を追究するのか見通しをもてず、教師から課題や資料が示されるのを待つ姿も見られた。

②既習を地域へ働かせる

橋の建設前後の写真を比較すると、「お金がかかったのではないか」「どうしてこの橋が必要だったのだろう」といった反応が生まれた。「どうして茶豆大橋は作られたのだろうか」と問うと、浜松市での学習を手掛かりに次の発言があった。

【A 児・見通しをもつ場面での発言】くろさき茶豆大橋も浜松市のこども広場と同じように、地域の人の願いから生まれたんじゃないか？でもどのような地域の声があって、できたんだろう。

児童は、ロイロノートの共有ノートに蓄積した資料を使って調べた。資料には、渋滞率や救急搬送等の新潟市の課題、市職員の話、市民の願いを示す新聞記事等があった。

複数の資料を関連付けて考える児童も見られた。一方で、学習課題の文言をそのまま検索する児童もいた。検索結果に示された文章を、そのまま書き写す姿も見られた。前時までの学習内容や、すでに提示された資料へ戻って考えることも十分ではなかった。資料自体はロイロノート上に残っていた。しかし、各時間の問いに応じて教師が資料を提示する使い方が中心であった。そのため、資料同士がどのようにつながっているのかを、児童が捉えにくかったと考える。

また、自分の問いや判断に応じて既習資料へ戻り、必要な根拠を選び直す学習も十分に位置付けていなかった。その後、市職員の話を聞き、政治の働きを整理した。単元終末には、地域課題について市長への手紙を書く活動を行った。A 児には、自分の生活と行政との関わりを考える記述が見られた。

> **【A 児・単元終末での記述】**わたしの通学路には道が狭くて交通量が多い、事故が多いところがある。信号がついたりすればいいな。市役所とかに私たちの言葉を届けたい。

この記述からは、政治を自分の生活と結び付けて考えようとする姿が見られる。一方で、複数の資料を根拠として提案の必要性を吟味するところまでは至らなかった。

③成果と課題

【成果】教科書で学んだ政治の仕組みを、地域の事例に当てはめて考えることができた。自分の生活課題と行政との関わりに目を向ける児童も見られた。

【課題】教科書事例の後に地域事例を加えたため、追究のつながりや単元全体の見通しをもちにくかった。また、資料は蓄積されていたが教師による提示が中心で、児童が既習資料に立ち返り、複数の資料や視点を関連付けながら判断を深める場面が十分でなかった。さらに、行政への提案も、複数の資料を根拠に提案の必要性や妥当性を吟味することはできなかった。

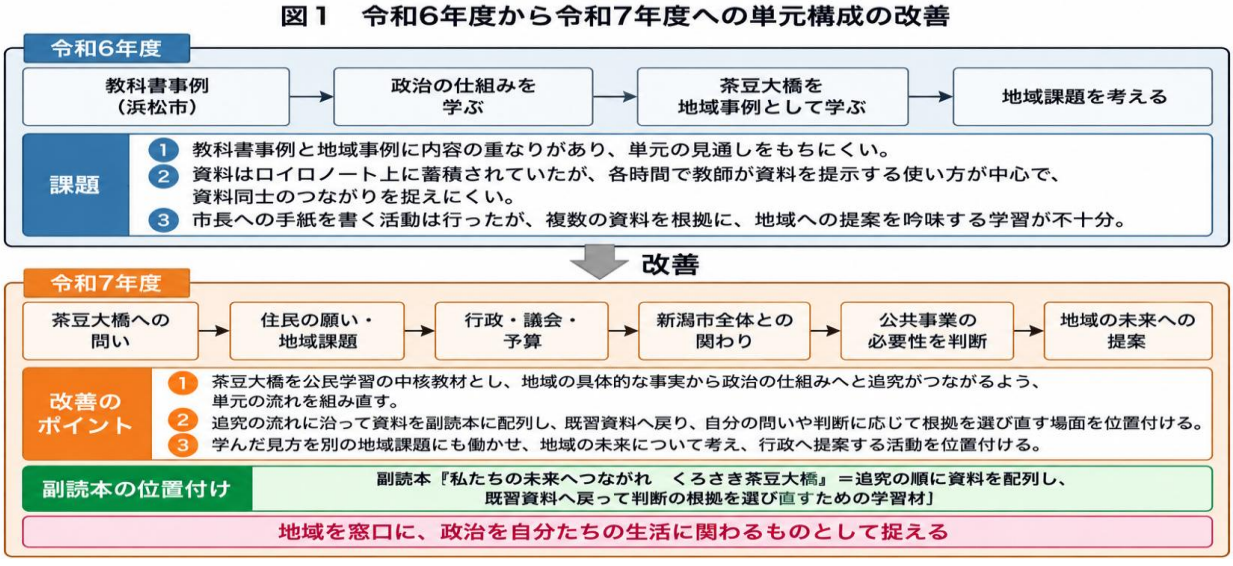
（2） 実践２ 「わたしたちの未来へつながれ くろさき茶豆大橋」黒埼南小学校６年１組２３名

令和７年６月実施 全１１時間

①実践１の課題を受けた単元の再構成

実践１の三つの課題を受け、①茶豆大橋を中核に「地域の事実→政治の仕組み→判断・提案」と追究する単元へ再構成、②町史・行政・議会資料、住民インタビュー等を三条件に基づいて選定し、副読本へ追究の順に配置、③学んだ見方を別の地域課題へ働かせ、行政へ提案する場面を設定した。③は、政治を行政に任せるものとして捉えるだけでなく、地域の構成員として自分たちも地域の未来に関わることができるという社会参画への意識を育てることを意図した。改善の本質は紙媒体化ではなく、単元全体の資料群を構成し、既習資料に立ち返り、複数の資料や視点を関連付けながら判断を深められる場面を設けた点にある。図１に、令和６年度から令和７年度への単元構成の改善を示す。

図１ 令和6年度から令和7年度への単元構成の改善



②地域の願いから政治の仕組みへ

児童の見方の変化を具体的に捉えるため、以下ではB児の記述を代表事例として取り上げる。

導入時のB児は、橋を「渋滞が減り、生活が便利になるもの」と捉えていた。

【B児・導入時】くろさき茶豆大橋をつくったことで、大きな道ができ渋滞が減った。くらしが便利になってよかったと思う。

地域住民の願いを捉えた後、「地域の人に願いがあれば、橋は自然にできるのか」と問い返した。児童は、副読本の行政組織図や年表を使って、橋が実現するまでの流れを調べた。住民の願いが行政に届き、市が調査や計画を行うことを捉えた。また、市議会で必要性や予算が話し合われ、工事へ進むことを学んだ。学習後、B児は次のように記述した。

【B児・政治の仕組みの学習後】地域の人がほしいと言っただけではなく、市が調べたり議会で話し合ったりして、税金を使ってつくられている。

B児は、地域住民の願いと行政・議会・税金とのつながりに気付いた。橋ができるまでの過程を通して、政治の仕組みを捉え始めた。さらに、茶豆大橋が新潟中央環状道路の一部であることを調べた。副読本の地図や市職員の資料を用いた。そこから、渋滞や救急搬送、防災等、新潟市全体の課題にも関わる橋であることを追究した。

【B児・新潟市全体との関わりを追究した後】新潟市役所の人の資料を読んだら、災害や救急のときにも必要だと分かった。ぼくたち黒埼の住民のくらしが便利になるためだけの橋ではなく、新潟市のみんなのために税金が使われていたと分かった。考えが変わった。

B児の見方は、地域の利便性から新潟市全体の生活へと広がった。身近な橋と、行政や税金等の政治の仕組みとのつながりを捉えるようになった。地域を窓口に、政治を自分たちの生活に関わるものとして捉え始めた姿と考える。

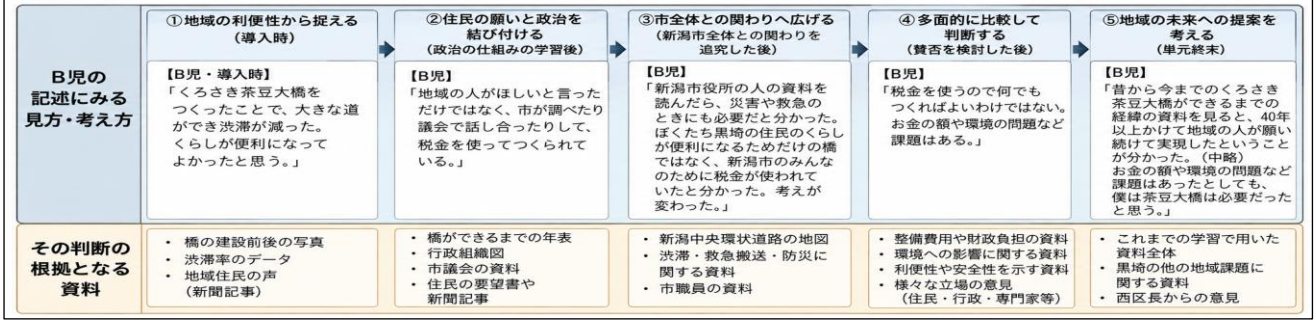
③既習資料に立ち返り、多面的に判断する

単元後半では、公共事業の必要性について考えた。副読本には、橋の利便性や安全性を示す資料を収録した。一方で、財政負担や環境への影響を示す資料も収録した。児童は資料を比べながら、「多くのお金をかけて橋をつくることに賛成か、反対か」を考えた。その際、「誰にとって、何を大切にした意見なのか」という視点で賛否の意見を整理した。その後、「なぜ橋の完成までに40年もかかったのか」と問うた。児童は、住民の要望、議員への要望書、商工会議所の提言等を調べた。また、予算や都市計画の変化も調べた。そこから、限られた予算や他の課題との関係を考える必要があることを捉えた。公共事業では、何を優先するかを判断する必要があることにも目を向けた。単元終末では、「税金や多くの時間を使ってでも、くろさき茶豆大橋をつくる必要があったのか」と問うた。この場面では、新しい資料を提示しなかった。児童が、それまでに扱った資料へ戻り、自分の判断の根拠を増やしたり、考えを広げたりできるようにした。B児は、次のように記述した。

【B児・茶豆大橋についての単元終末での記述】税金を使うので何でもつくればよいわけではない。でも、昔から今までのくろさき茶豆大橋ができるまでの経緯の資料を見ると、40年以上かけて地域の人が願い続けて実現したということが分かった。（中略）お金の額や環境の問題など課題はあったとしても、僕は茶豆大橋は必要だったと思う。

B児は、既習の「橋ができるまでの経緯」の資料へ戻っていた。この資料は、教師がこの場面で新たに示したものではない。B児は、地域住民の願いに加え、費用や環境面の課題も踏まえて判断していた。B児の見方の変化と、判断を支えた資料を図2に示す。

図２　B児の見方・考え方の変化と判断を支えた資料



④学んだ見方を地域の未来へ働かせる

令和6年度の課題を踏まえ、学んだ見方を別の地域課題へ働かせる場面を設けた。「これからの黒埼をどうしていきたいか」を考える活動である。児童は、交通、防災、高齢化、農業、観光等から関心のある課題を選んだ。同じ課題を選んだ児童でグループをつくった。話合いでは、茶豆大橋の学習で働かせた見方を用いた。「誰が困っているのか」「どのような効果があるのか」「費用や他の課題との関係はどうか」という視点である。児童は、これまでの資料や学習履歴へ戻りながら、地域の未来に向けた提案をまとめた。提案は西区長にプレゼンテーションした。区長から意見をもらった後、自分たちの提案を振り返った。必要に応じて、提案の内容も見直した。この活動では、政治を「行政が行うもの」として学ぶだけではなく、自分たちも地域について考え、行政へ意見を伝えられることを経験した。地域を窓口に学んだ政治の見方を、実際の社会への関わりに働かせる場面として位置付けた。単元末には、「資料を根拠に『必要かどうか』『どうしたらよいか』を考えられた」に23/23名が肯定的に回答した。提案活動では、児童は「誰が困っているのか」「どのような効果があるのか」「費用や他の課題との関係はどうか」の三視点を用いた。例えば防災×交通安全チームは、液状化や通学路の安全を自分たちだけでなく高齢者にも関わる課題として捉えた。西区長への発表後は意見を受けて提案を見直した。自己評価や代表事例のみで学級全員の同一の変容を証明することはできないが、複数の提案内容からも、学んだ見方を別の地域課題へ働かせる姿が確認できた。その際に提案資料や発表原稿に、それまでに扱った資料・学習内容を根拠として記述していた児童は23/23であった。単元後の11月に実施した新潟市生活・学習意識調査では、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがあります」に23名中21名（91.3%）が肯定的に回答した。単元前後の変化を示すものではないが、学級全体にも、地域や社会をよりよくするために考えようとする意識が広く見られた。以上から、児童には、地域を窓口に学んだ政治の見方を別の地域課題へ働かせ、根拠をもって判断するとともに、地域の構成員として社会への関わり方を考える姿が見られたと考える。

3　実践の成果と課題

(1) 成果

二年間の実践から、次の二点が成果として挙げられる。一つ目は、地域の具体的な事実を継続して追究することで、住民の願い、政治の仕組み、市全体との関わり、費用や環境等へと見方を広げ、政治を自分たちの生活や地域課題と結び付けて考える学習を構成できたことである。その中で学んだ見方を、別の地域課題への提案に働かせ、地域の構成員として社会への関わり方を考える姿も見られた。二つ目は、単元の追究と資料活用を結び付けたことである。令和7年度は、単元全体で扱う資料群を追究の流れに沿って構成した。その中で、児童が既習資料に立ち返り、複数の資料や視点を関連付けながら、公共事業の必要性について判断を深める姿が見られた。

(2) 課題

一つ目は、資料の提示方法である。紙媒体には単元全体を見渡し、既習資料へ戻りやすいよさがある一方、拡大等には制約がある。今後は、資料の特性に応じて紙とデジタルを使い分ける必要がある。二つ目は、6年間を通した地域学習と社会参画の積み重ねである。地域の未来を提案する場面では、児童の地域理解や提案の深まりに差が見られた。これまでの生活科、総合的な学習の時間、社会科では、地域について知るだけでなく、地域の人と関わり、地域の課題を考える経験を重ねている。今後は、主権者教育の視点から、小学校6年間の地域への理解と関わりの蓄積を公民学習へつなぐとともに、中学校社会科への接続も意識して実践を重ねていきたい。

〈参考文献〉

・文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編』日本文教出版
・国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　小学校　社会』